

市史のひろば

第1号
(令和3年11月)



上野国分尼寺（金堂）復元想像画（塚越潤氏制作）

《 目 次 》

「市史のひろば」開設にあたって（高崎市立中央図書館長 今井伸一）	… 2
上野国分尼寺復元想像画の制作について（塚越 潤）	… 2
来迎寺中世遺跡の永福寺瓦（山本隆志）	… 3
新発見の落合文書（森田真一）	… 5
執筆者紹介・奥付	… 6

「市史のひろば」開設にあたって

高崎市立中央図書館長 今井伸一

高崎市は西暦 2000 年が市制施行 100 周年の節目の年にあたり、その記念事業として市史が編さんされました。

それから早くも四半世紀近くの歳月が流れ、この間には平成の大合併が行われ新高崎市が誕生しております。

合併した旧町村にも町誌、村誌がありますが、将来的な視点で新たな高崎市として一元化された市史の編さんに備え、前回の編さん後の新たな発見や、後世に語り継ぐべき事業などの資料を収集保存しておくことが非常に大切です。

市史の編さんは古代、中世、近現代など、時代ごとに高崎の歴史を学術的、体系的に編纂するため、幅広い人材の協力が不可欠で莫大なエネルギーを要するものでした。

当時の編さん事業に携われた多くの皆様から、新たな発見や発掘作業の成果などの情報提供や、市民の皆様にもわかりやすく高崎の歴史について知っていただく場を設けたいというご意見をいただきました。

高崎市では 2013 年から始まった高崎学検定も定着し、図書館では郷土資料の充実に努めるとともに、古文書講座なども開設しておりますが、高崎の歴史に興味を持っていただき、ご協力いただける人材の発掘も大切なことと考えております。

今般、図書館ホームページにおいて、「市史のひろば」を開設し、新たな発見やトピックスなどについて、郷土史の専門家、行政の各部門、及び市民の皆様からご寄稿をいただき、より身近な高崎の歴史を紹介する場を創出したいと考えております。

どうか、多くの皆様にご閲覧いただくとともに、今後の関係各位のご協力をお願い申し上げます。



上野国分尼寺の復元想像図は、既に新聞やテレビでも報道されご承知の方も多いと思います。

塚越さんは一級建築士として市に長らく勤務され、市庁舎、総合福祉センターなどの建設に携われました。また、絵画については日展入選もされ現在は高崎市美術館長を務められています。

井上靖著の「天平の甕」で有名な、奈良西ノ京の唐招提寺なども参考にされたそうですので、訪れたことのある方は、郷土群馬にこのような大伽藍がそびえていたのかと思われるのではないのでしょうか。

塚越さんが、礎石などからどのような方法や視点で復元想像図を製作されたのか大変興味深いものがありご寄稿をいただきました。

上野国分尼寺復元想像画の制作について

塚越 潤

高崎市教育委員会によって上野国分尼寺の発掘調査が進み、その概要が明らかになった。8 世紀半ばに建立された寺院の規模は南北 160m、東西 160m の広大なものだった。その中心となる金堂は東西 24m 南北 13m と推定されるが、その柱の跡や屋根瓦などが発掘された。柱跡の位置図だけでは実際にどのような建物があつたのか想像できないが、それがわかるような絵を描いてほしいと市文化財保護課より依頼された。絵といっても単に想像で描くのではなく、実際に発掘された通りの柱の位置や間隔で描かなければならない。不明

の部分は学術的に考えられる同時代の様式を踏まえ、建物を復元をした場合にどのように見えるかを正確に描こうと考えた。

参考資料としては発掘図面のほかに、同時代の国分尼寺として回廊、中門が復元されている上総国分尼寺の図面、写真などの資料、また金堂については、奈良時代建立の金堂として唯一現存している唐招提寺の断面図と写真、その他薬師寺、東大寺などの写真資料を使用した。



■全体俯瞰図

まず、この建物の姿をわかりやすく伝えるためにはどのように表現したらいいかを考え、全体の施設群がわかる俯瞰図と中心となる金堂の拡大図の2枚で表現しようと考えた。そして全体を把握するために俯瞰図から描くことにしたが、金堂、講堂、住居だった尼坊、経典を置いた経蔵、鐘を突く鐘楼、それらをつなぐ回廊や中門など一つ一つの建物について立面図を想定して作業にかかった。

俯瞰図を描いているうちに本当にこんな巨大な建造物群が奈良時代の高崎にあったのだと改めて驚いたが、これだけの建物を作る優秀な宮大工とその材料となる良質な檜が豊富になれば到底建設しえなかったろうと思った。

次に金堂の絵に着手したが、この建物の見せ場は屋根を支えている木組みの複雑な構造だと思う。金堂は参考となるものが唐招提寺しかないが、大きさもほぼ同じなので、その木組みを参考とした。屋根は土の瓦で葺かれ、相当の重量を支えていたのが三手先（みてさき）といわれる木組みだが、その構造が理解できないと絵に表現できない。しかしいろいろな資料による断面図だけでは理解できず、立体的な説明図なども探して参考にした。

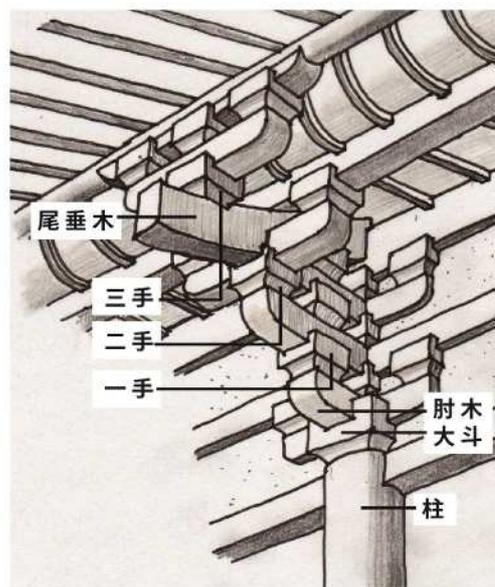
そして柱は直径45センチ、床から軒下まで5mの高さと想定した。

柱の上部には大斗といわれる箱のような受け斗があり、その上に肘木という横材が乗りその上に3つの斗が乗っている。これがさらにその上の肘木を支え、三重構造になり屋根を支える三手先となっている。

この組み物を貫通するように中央に尾垂木（おだるき）という構造材がありこれが柱を中心として天秤のように重い屋根と深い軒先の荷重を吊り合わせているが、デザイン的にも美しいポイントになっている。こういった部分を立体的に理解して絵にかかるまでいろいろな資料と格闘し、やっと1本の柱とその上の組み物の構造がわかり、作業を進めることができた。

その後コンピューターの画面上で金堂の細部を作り全体ができた後、見上げの角度を検討して下図を作った。それをイラストボード上に書き写して、さらにその上からアクリル絵の具で仕上げていった。

背景の榛名山は現地で同じ位置からスケッチしたものを組み合わせて描いた。



■三手先

このように下調べから完成まで1年近くの時間を要したが、多くの人にご覧いただき、郷土にあった上野国分尼寺を理解する手助けになってくれたら幸いである。



山本先生は、新編高崎市史編さんにおいては中世部会専門委員として活躍され、その後も県内各地での講演会などを通じて、郷土への理解を深めるため様々な活動をされています。

先ほどの塚越さんの国分尼寺復元想像図では天平の甍を思い起こしましたが、山本先生のご寄稿は「永福寺瓦」についてです。

先生の文に記されている時代は、蒙古襲来や正中の変などが起こり、鎌倉幕府が衰亡に向う頃です。先生はその頃の来迎寺遺跡の土に埋もれた瓦から新たな歴史的視点を論じられています。

来迎寺中世遺跡の永福寺瓦

山本 隆志

昨年（2020年）11月、市内足門にある文化財保護課発掘事務所で、浜川北遺跡の遺物を見学させていただきました。神奈川県立歴史博物館の知人といっしょに、係の方の解説をうけながら拝見しました。この遺跡は来迎寺中世遺跡ともいわれるように、現在の来迎寺の場所で発掘されたのですが、私には驚くものがありました。現在の来迎寺は時宗寺院ですが、その建立は南北朝時代と言われていますし、墓地にある五輪塔・宝篋印塔は南北朝・室町期のものです。ところが、この来迎寺遺跡から、来迎寺の前の時代に、別の寺院があったと考えさせる遺物が出てきたのです。13世紀中頃（あるいは後半）のものと考えられる瓦が出てきたのです。瓦は寺院の屋根にのせられるもので、鎌倉時代の武士の館には見えません。

浜川北遺跡からは、古瀬戸蔵骨器や五輪塔石材、そして多数の瓦が出てきました。その瓦は形や文様や焼き方から、鎌倉の永福寺（ようふくじ）の瓦と同じものです。鎌倉の寺院の屋根に用いられていた瓦と同じものが、群馬・高崎（上野国）の寺院の屋根にのせられていたのです。

鎌倉永福寺出土の瓦は、三期に区分されるようですが、来迎寺遺跡永福寺瓦はその第二期に該当するようで、13世紀の中頃（あるいは後半）のものだそうです。この瓦は、埼玉県児玉郡美里町の窯（水殿窯）で焼かれたと推定されています。そこで焼かれた瓦が、鎌倉永福寺に、また高崎来迎寺遺跡寺院に持ち込まれた、と考えられます。永福寺瓦を媒介にした武蔵西北水殿窯と上野国来迎寺遺跡寺院との結びつきがあるはずです。

この浜川北遺跡は従来、中世の居館址として説明されてきました（『新編高崎市史資料編3中世I』、1996年3月）。それが『高崎市内遺跡出土資料報告書1』（1997年3月）の「第



■発掘された永福寺瓦（『高崎市内遺跡出土資料報告書1』より）

募忠信、屋敷分事、
以時節不可有相違候、
謹言、

十月十二日 顕定（花押）
寺尾左京亮殿

忠信を募り、屋敷分の事
時節を以て相違あるべからず候、
謹言、

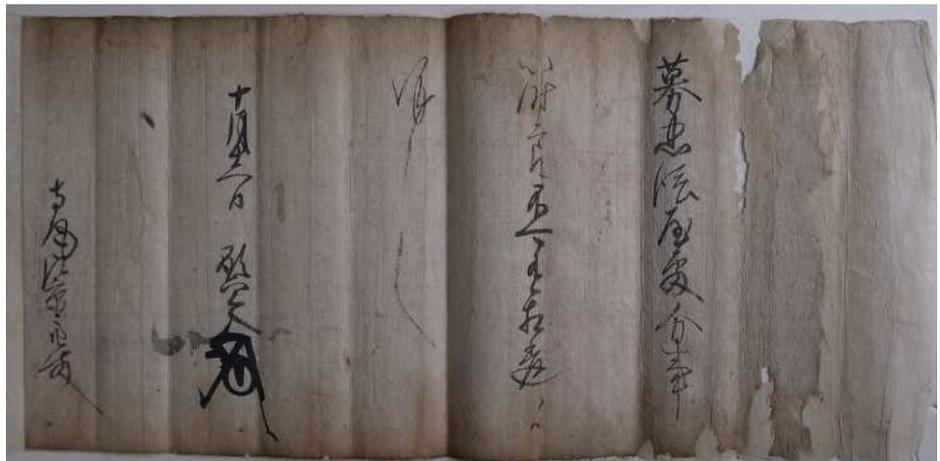
十月十二日 顕定（花押）
寺尾左京亮殿

関東管領で上野国守護の上杉顕定が寺尾左京亮の忠信に対して、屋敷分を保証したものである。花押の形から判断して、年次は永正元年（1504）よりも前のものである。

料紙は切紙で書止文言は「謹言」、年付はない。袖が広く欠損しているが、他の文書を踏まえて、広く裏打ちしている。表装されていないために文書の裏面の状態や汚れなども確認でき、文書をモノ資料として捉える際の史料価値がとても高いものである。

これまで知られていなかった情報が記された文書も多く、高崎地域の歴史を解明する上でも、今後の活用が期待される。

なお、詳しく知りたい方は、拙稿「史料紹介「落合文書」」（『長野市立博物館紀要（人文系）』22号、2021年）をご覧ください。



■上杉顕定判物（長野市立博物館蔵）

執筆者紹介

塚越 潤 高崎市美術館長

山本 隆志 筑波大学名誉教授、元高崎市史編さん中世部会専門委員

森田 真一 群馬県立歴史博物館学芸員

市史のひろば 第1号

発行日 令和3年（2021）11月1日

編集・発行 高崎市立中央図書館

〒370-0829 高崎市高松町5-28

TEL 027-322-7919 / FAX 027-324-3423

E-mail toshokan@city.takasaki.gunma.jp

※「市史のひろば」は、高崎市立図書館公式ホームページに掲載されています。
(<https://lib.city.takasaki.gunma.jp/>)